

「單た、人たるもの、行ふべき所を行ふを知るのみ。」

「オー請ふ、誰か斯かる貴き、高き教を、教へたるか！」

「母!!!」

聲は濕ひて、ハラ／＼と、小さき袖に抑へ取えぬ涙、答と共に、數行溢れ下りぬ。(未完)

He Who avoids the temptation avoids the Sin

誘惑を避くる者は

罪を避くる者なり。



新年の歌

佐々木信綱

山を越え海を渡りて新玉の

年の使は今いたるらし

新らしき望の光胸にみちて

心のどけき初日影かな

富士のねのみ雪の上に初日さして

年たちにけり大八しま國

冬月 (竹柏園歌會)

井上正直

夕まぐれ落葉集めてたさすてし

烟にくもる三日月の影

狼の聲もきこえて霜さゆる
相澤 朧

森の木末に月更にけり

小原 頼之

夜さはりがうつ拍子木の音さえて

いらかの上の月ぞふけゆく

又原 保行

つまこふてあし間にさはぐ鶯鳴の

數さへ見ゆる冬の夜の月

横山 頤

物ほしにはし忘れたる幼子の

むつきを照す冬の夜の月

石樽 千亦

頭まで物につゝみてゆく人の

はかに影なし冬の夜の月

關屋 祐之

立つやく濱海道の松林

人かげあらず冬の夜の月

井上 公二

から〜と下駄の音さえて片町の

霜夜寒けし片われの月

吉田 久彌

橋の上におく霜白く月さえて

隅田大川夜しづかなり

山崎 房吉

よく晴れし空よ月よと稱へつゝ

いそがはしくもとさす夜半かな

袖山 源之

かく霜に十日あまりの月さえて

我かへるさの道の寒けさ

澤 式

門附のをみなの影の只一つ

大路に黒し冬の夜の月

湯川 貫一

小夜嵐おほふにせばき袖の上に

うたてもさゆる冬の夜の月

龜山 新一

半鐘のひびきはたえて冬の夜の

裏町さびし片われの月

新井 千湧

木枯のひゞきの中に日はくれて

やせ畑寒し冬の夜の月

館 資 次

冬木立かれてたちたる木間より

さすかげ氷る片われの月

松 寺 久 雄

風すさび月さゆる夜を夜もすがら

狂女叫べり森の一つ家

伊 藤 梅 子

あしたづのねぐらの松に霜ふりて

かげもさひけき冬の夜の月

増 山 三 雪 子

埋火のもとをはなれて冬の夜に

みがさあげたる月を見る哉

板 倉 止 子

とぎすます剣とや見ん雪晴し

軒のつらゝをてらす月かげ

板 倉 藤 子

木葉ちりてみるものもなき冬枯の

山のはずゑに月は出にけり

小幡八重子

かねの音あらしにさえて冬の夜の

つきかげしづむ不惑の池

田中みの子

木の葉みな散りつくしたる山のはを

ひとりしめてもすめる月哉

大澤國子

やどるべき梢あらはに霜枯れて

光身にしむ冬の夜の月

加藤雛子

町はづれ若き女のたゞひとり

かへる霜夜に月さえわたる

大村八代子

はかなげに残る紅葉の一葉二葉

夜さへ見えて月さえ渡る

佐藤朝恵子

道のべに小琴かきならすものごひの

しはぶささむし冬の夜の月

小林茂子

木枯のつよさま夜中齒をやみて

ねられぬまゝに更し月みる

東くめ子

つらゝる瀧川の瀬にくだかれて

いよゝつめたき月の影かな

田中たを子

風寒み都大路も人たえて

我影さびし冬の夜の月

有賀晴子

高さひくき家々のかげを地になげて

こほるが如し冬の夜の月

大竹伊勢子

夜鳥のなく聲寒み見あぐれは

色なき枝に月冴えわたる

中村文子

ひろりべに語りふかして友が門

いづればさむし冬の夜の月

久保花子

風寒み人通りなき川添の

霜の上照らす冬の夜の月

森田妙子

車やのしはぶさやみて橋のもと

北風寒く月さえわたる

慶野華子

冬の夜の月は軒端にかゝりけり

かれし木立を庭にゑがきて

吉田静子

はりつめし池の水に影さえて

いとくさびし冬の夜の月

紅梅

牧

羊

去年うつし栽えし

紅梅一本

霜をやぶりて

南の枝ゆ

一輪二輪

今朝咲き初めぬ

幼兒一人

我を見上げて

『お父つあんの

お顔の様だわ

あの花の色は』

『さなり我子よ

あの花こそは

花の魁

年の始めの

屠蘇に酔ひつゝ